

美術評論家連盟 シンポジウム 2025



オンライン開催  
[予約不要]

# 変容の時代に、 万博、美術館を 考える

2025年10月12日(日)

13:00-18:00 主催:美術評論家連盟

## 第一部

### 「関西万博 への問い」

君島彩子  
暮沢剛巳  
三木学

モデレーター:五十嵐太郎

1

## 第二部

### 「変動する 美術館」

卯城竜太  
岡部あおみ  
菅原伸也

モデレーター:四方幸子

2

デジタル化の浸透、フェイクの増殖、進化するAIの技術、バックラッシュ、噴出する紛争と戦争、むき出しになる大国のエゴ、深刻な地球温暖化..。20世紀に確立し、私たちが前提としていた近代社会の底が抜けるとともに、新しい状況が出現し、世界は不安定な時代に突入している。西洋から広がった様々なシステム—政治、経済、社会、都市、文化、知の体系に至るまで—は揺るがされ、再構築されるのか、あるいは破綻(を経ての再生?)に向かうのか。それは美術においても同様であり、美術館、展示、批評、建築などのあり方および存在意義が問い直されている。本シンポジウムでは、近代社会に源泉をもつ万博や美術館における「展示」の空間に注目し、現在起きていることを確認するとともに、今後の展望を議論する。

# 変容の時代に、 万博、美術館を考える

2025年10月12日(日) 13:00-18:00

主催：美術評論家連盟

## 第一部 [13:00-14:50]

### 1 「関西万博への問い」

君島彩子、暮沢剛巳、三木学  
モデレーター：五十嵐太郎

大阪・関西万博は、事前に多くの批判を受けながらも、開催されると、大勢の来場者で賑わった。建築群が注目された一方で、アートは添えものになったと指摘されている。もっとも、今回の展示では、少し前のメディア・アートの焼き直しというべきものも少なくなく、大衆への通俗化としてとらえることもできるだろう。歴史を振り返ると、そもそも万博は最新の技術を紹介し、世界の同時代性と多様性、そして進歩を意識させる場として始まった。会場の一角には美術の展示も含まれていた。19世紀末に始まったヴェネチア・ビエンナーレも、国別のパビリオンを使い、万博的な形式を現在も継承している。美術と建築に少なからず関係をもって万博。だが、批評の分野では無視されがちなテーマである。そこでSNSの時代に開催された大阪・関西万博が、どのような意味をもつのかを議論したい。

### 3

[17:00-18:00]

### オープン・ ディスカッション

出演者視聴者の方々  
とのディスカッション

モデレーター：五十嵐太郎

## 第二部 [15:00-16:50]

### 2 「変動する美術館」

卯城竜太、岡部あおみ、菅原伸也  
モデレーター：四方幸子

今世紀以降、美術館は建築、デザイン、展示、教育普及などを介して、より広く人々へと開かれた場となった。美術は欧米中心のものから多文化的なものへと拡張し、また世界各地で国際展や芸術祭が開催され多くの人々を集めている。そのような中、近代以降に確立された、美術館というものの成立基盤を検討する動きが生まれている。18世紀末に市民のためのものとして生まれたルーヴル美術館は、「展示」や「啓蒙」を目的としていた。近年、美術や美術館というものがそもそも欧米中心・視覚優先・権威主義的であったことへの見直しが急速に進みつつあるが、同時にアーティストやアクティビストによる美術館への批判や攻撃も頻発している。第二部では、現在まさに大きな変動にさらされている美術館の存在意義と今後のあり方を検討する。

五十嵐太郎  
Igarashi Taro



パリ生まれ。建築史・建築批評。博士(工学)。東北大学大学院工学研究科教授。第64回芸術選奨文部科学大臣新人賞。第11回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展(2008年)日本館コミッションナー、あいちトリエンナーレ2013芸術監督をつとめる。ほかに「インボッシブル・アーキテクチャー」展(2019-20年)、「Windowology」展(2020-22年)、「Quand la Forme Parles」(2020-21年)、「アニメ背景美術に描かれた都市」展(2023年)などの監修をつとめる。主な著書に『新宗教と巨大建築 増補新版』(青土社、2022年)、「増補版 戦争と建築」(晶文社、2022年)、『モダニズム崩壊後の建築—1968年以降の転回と思想』(青土社、2018年)、『建築の東京』(みすず書房、2020年)など。\*

卯城竜太  
Ushiro Ryuta



アーティストコレクティブChim↑Pom from SmappalGroupのメンバー。2005年に東京で結成。社会問題やそのシステムに対して独特な視点から現代のリアルを提示、都市論などを展開する。国際的に活動を展開し、各国の国際展、ビエンナーレに参加。グッゲンハイム美術館、ボンビドウ・センターなどにコレクションされ、アジアを代表するコレクティブとして活動を展開中。個人としては新宿のスペースWHITEHOUSEの運営や、歌舞伎町アートセンター構想委員会他、秘匿性の高い展覧会「ダークアンパダン」のディレクション、執筆、daitai art mapの運営などを手掛ける。主著に『活動芸術論』(2022年)など。

岡部あおみ  
Okabe Aomi



東京都生まれ。美術評論家、キュレーター。ボンビドウ・センターで「前衛芸術の日本1910-1970」、「国際美術映像ビエンナーレ」に関わる。パリ国立高等美術学校講師・客員教授、ニューヨーク大学客員研究員。メルシャン軽井沢美術館チーフ・キュレーター、武蔵野美術大学教授、パリ日本文化会館展示部門アーティストティック・ディレクター、上野文化の杜未来構想実行委員会国際部ディレクターを歴任。パリで真鍋大度+石橋素展、内藤礼展、米田知子展などを実施。95年の震災後、ジョルジュ・ルース版神アートプロジェクト、東日本大震災後に宮城県松島でもアートプロジェクトを実施。著書に『ボンビドウ・センター物語』、『アートと女性と映像—グローバル・ウーマン』ほか。映像の監督作品に「田中敦子 もうひとつの具体」。インタビューサイト:culture powerを発足。\*

君島彩子  
Kimishima Ayako



和光大学講師。専門は物質宗教学、宗教美術史、近代仏教史、万博学。国際日本文化研究センター博士研究員、日本学術振興会特別研究員を経て現職。博士(学術)。「現代のマリア観音と戦争死者慰霊」にて中外日報社、第15回涙骨賞。学位論文「平和祈念信仰における観音像の研究」にて第15回国際宗教研究所賞・奨励賞受賞。単著『観音像とは何か——平和モニュメントの近・現代』(2021年、青弓社)。監修した展覧会に「万博と仏教——オリエンタリズムか、それとも祈りか」(2023年)など。近年の論文「地蔵信仰における石と布」『宗教と社会』(2024年)、「沖繩国際海洋博覧会と平和祈念公園の成立」『万博学 = Expo-logy』(2024年)など。

暮沢剛巳  
Kuresawa Takemi



青森県生まれ。美術評論。武蔵野美術大学、女子美術大学講師を経て、東京工科大学デザイン学部教授。著書に『核のプロパガンダ』(平凡社)、『ミュージアムの教科書』(青弓社)、『拡張するキュレーション』(集英社)、共著に『オリンピックと万博』(筑摩書房)、共著に『万国博覧会と「日本」』(勁草書房)『大阪万博が演出した未来』『幻の万博』(以上、青弓社)、『History of Japanese Art after 1945』(Leuven Univ Press)など。\*

四方幸子  
Shikata Yukiko



十和田市現代美術館館長、美術評論家連盟会長。「対話と創造の森」アーティストティックディレクター。多摩美術大学・東京造形大学客員教授、武蔵野美術大学・情報科学芸術大学院大学(IAMAS)・京都芸術大学非常勤講師。「情報フロア」というアプローチから諸領域を横断する活動を展開。1990年代よりキヤノン・アートラボ(1990-2001年)、森美術館(2002-04年)、NTTインターコミュニケーション・センター(ICC)(2004-10年)と並行し、インディペンデントで先進的な展覧会やプロジェクトを多く実現。国内外の審査員を歴任。著書に『エコゾフィック・アート 自然・精神・社会をつなぐアート論』(2023年)。共著多数。

菅原伸也  
Sugawara Shinya



美術批評・理論。1974年生まれ。コンテンポラリー・アート、そしてアートと政治との関係を主な研究分野としている。主な論考に、「質問する」(ART IT)での田中功起との往復書翰、「タニア・プルゲラ、あるいは、拡張された参加型アートの概念について」(ART RESEARCH ONLINE)、「リヒター、イデオロギー、政治——ゲルハルト・リヒター再読」(『ユリイカ』2022年6月号)がある。最近の論考に、「いかにして美術史を語るか、もしくは語らないか—3つの展覧会を中心にして:「TRIO」 「シアスター・ゲイツ展」 「異文化は共鳴するの?」」(Tokyo Art Beat)など。\*

三木学  
Miki Manabu



奈良県生まれ。美術評論、色彩研究、ソフト開発。大阪府万博記念公園運営審議委員。京都芸術大学非常勤講師。共編著に『大大阪モダン建築』(2007年)、『フランスの色景』(2014年)、『新・大阪モダン建築』(2019年、すべて青幻舎)、『キュラトリアル・ターン』(昭和堂、2020年)など。展示・キュレーションに「アーティストの虹—色景」(あいちトリエンナーレ2016) (愛知県美術館、2016年)など。ソフトウェア企画に、「Feelimage Analyzer」(ビバコンピュータ株式会社、IPAソフトウェア・プロダクト・オブ・ザ・イヤー2009受賞)など。\*

\*美術評論家連盟会員

2025年度 シンポジウム実行委員会:五十嵐太郎(実行委員長)、暮沢剛巳、四方幸子、三木学

【お問い合わせ】

美術評論家連盟 シンポジウム 2025 実行委員会

美術評論家連盟 <aicajpn@gmail.com> 内

美術評論家連盟 イベントページ →

